

希望と現実のライフコースからみた乳幼児をもつ母親の 時間的展望と育児不安の関連

宮本 純子

Relation between time perspective and childcare anxiety of
mothers from a viewpoint of ideal versus real life course

Junko Miyamoto

Abstract

This study examines the relation between time perspective and childcare anxiety of mothers who have small children from a viewpoint of life course. Mothers with small children were categorized into four groups; Group I: mothers who work; Group II: mothers who stopped working, but plan to return to work; Group III: mothers who don't want to work and stay at home; Group IV: mothers who stopped working, but plan to return to work when their children grow up. Further, each group can be categorized into two subcategories: Subgroup A comprising mothers who could choose their ideal life course; Subgroup B comprising those who could not do so.

The results revealed the following: Group I and Group II mothers who could choose their ideal life course and have a future purpose for their life can reduce childcare anxiety; Group IV mothers who could not choose their ideal life course and accept their past can overcome the sense of stagnation and feeling of sacrifice; Group II mothers who could not choose their ideal life course and have hope can avoid the fatigue.

Keywords: time perspective, childcare anxiety, life course

1. 問題と目的

ライフコースとは人々が辿る人生の道筋（岩井, 2010）であり、一生のうち、就学、就職、結婚、出産など、さまざまな出来事を経験し、その選択の積み重ねによってライフコースを分類することができる（佐々木ら、2009）。

現代の子育て世代の女性は、いったん離職し、出産・育児後に再就職する「再就職コース」や、出産後も就業を継続し、育児と仕事に並行して取り組む「継続就業コース」を理想とする割合が上昇しているが、「継続就業コース」を理想とする人の中で、それを実現させていく割合は 62.3%となっている。また、「再就職コース」を理想とする人の中で、それを実

現させている割合は 55.6% である。いずれも希望を実現させている割合は半数強にとどまっている（内閣府、2006）。希望のライフコースを実現している女性は半数程度であるとすると、「希望」のライフコースを実現できなかった女性はその葛藤を内面に抱え込んでいる可能性が高い。

近年、子育て期に数年後の自分の姿に展望を持てないという不安を抱く母親が増えている（大日向、2002）と指摘されている。それは、内面に抱え込んでいた葛藤が子育て中の閉塞感とともに浮上してきたとも考えられる。田中（2001）は、ふれあいスペース事業や電話相談事業などで出会った母親達の声から、子育て不安は生活不安、母親自身の人生の不安だと報告している。育児不安は、1970 年代後半から 1980 年代の前半にかけて牧野らによって指摘され（原口、2005），一連の研究（牧野、1982, 1985, 1987, 1988）がなされた。牧野が取り上げた「育児不安」は、一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し、蓄積された不安の状態を問題にし、「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」を育児不安と定義した。柏木（2001）は、女性のライフコースが多様化し、女性の生き方の選択の可能性が広がった今日、女性＝母親・妻ではもはや幸福な一生とはならないという現代女性の心の変化について述べている。原口ら（2005）も、今日の母親たちは“子育てをしたい”と同時に“自分の生き方を大切にしたい”という葛藤が生じる傾向が高く、その結果、育児を肯定的に捉えることが困難となり、育児不安を喚起する要因となっていることも示している。

このような子育て期において、過去の選択を受容し将来の見通しをもった生活を送れるかどうかは、子どもへの接し方に影響を及ぼすことが予想され、すでに乳幼児をもつ母親の時間的展望が育児不安と関連があることは明らかになっている（宮本、2007）。時間的展望とは、“ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体”を言い、未来の側面に関しては、いわゆる“みとおし”を指す（白井、1995）。時間的展望の獲得とは、より遠くの将来や過去の事象が現在の行動に影響を及ぼすという時間的展望の広がりが拡大すること、将来に希望を持ち現在の生活に充実を感じ過去を受容するという時間的展望の感覚を持つことを言う（白井、1991）。子育てのほかに、仕事という新たな価値を見出した女性達にとって、結婚や出産は将来を決める人生の転換点であり、場合によっては時間的展望が大きく変わる時であろう。希望のライフコースを選択できなかった母親は葛藤を抱え、過去を肯定的にイメージすることが難しいのではないだろうか。過去を受容して時間的展望を確立することが難しくなること、それは過去や未来を含む現在の生活空間、育児期の日常生活に影響を及ぼしている可能性がある。しかし、希望のライフコースを選択できなかった母親が、どのような時間的展望を持つことにより、育児不安を軽減できるのかは明らかにされていない。

そこで、本研究では、希望のライフコースを選択できたか否かにより、どのような時間的展望を持つことが育児不安を軽減するのかを把握するため、現実と希望のライフコースの一一致・不一致という視点から時間的展望と育児不安との関連をライフコースごとに検討するこ

とを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者

乳幼児（0—6 歳児）をもつ母親 2026 名を対象とし、回答が有効だった（有効回答率 85.20%）1726 名（公民館の育児サロンに参加している母親 803 名、保育園に子どもを通わせている母親 923 名）を分析対象とした。平均年齢は 34.20 歳 ($SD=5.48$) で、子どもの数は、1 人が 49.13%，2 人が 37.60%，3 人以上が 13.27% であった。

(2) 調査手続き

福岡市内の公民館(70 館)と保育園(12 園)に質問紙調査を依頼した。研究協力の依頼文に、研究目的、回答内容が漏れないこと、個人が特定されないことを明記した。公民館は主に質問紙を依頼し、後日、筆者が直接回収した方法と郵送で回収した 2 通りの方法をとった。1123 部配布し、952 部回収(回収率 84.78%)した。保育園は先生に質問紙を依頼し 2 週間後に回収した。1705 部配布し、1074 部回収(回収率 62.99%)した。回収票は 2026 部であった。なお、調査は 2010 年 9 月—12 月に行われた。

(3) 調査内容

時間的展望を測定する項目 白井（1994）の作成した時間的展望体験尺度を使用した。白井によれば、“時間的展望とはある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体”と定義されている。この尺度は、“現在の充実感”，“目標指向性”，“過去受容”，“希望”の下位項目から構成されており、時間的展望の体験的側面を測定している。代表的な項目は、順に“毎日の生活が充実している”“私には、だいたいの将来計画がある”“過去のことはあまり思い出したくない”“私には未来がないような気がする”である。全 18 項目からなり、回答は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法によった。集計にあたっては、順に 5 点、4 点、3 点、2 点、1 点と得点化した。

育児不安を測定する項目 母親の感情を構造的に捉えるために、広く利用されている一次元の牧野の育児不安尺度（1982）に、母親の不安尺度（岩田、2000），育児不安スクリーニング尺度（吉田・山中・巷野・太田・中村・山口・牛島、1999）など、既存の尺度を参考にして臨床心理学を専攻する大学院生 4 名（子育て経験者 1 名）で検討し、22 項目を選択した。評定は 4 件法で回答してもらった。

ライフコースを問う項目 就業継続型、再就職型、専業主婦型の三つの型（内閣府、2006）を I 就業継続型、II 再就職型（すでに現在就業している）、III 専業主婦型（今後もずっと専業主婦の予定）、IV 再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の四つの型に変えた。育児期の母親がすでに再就職している場合と、子どもがもう少し大きくなってから再就職しようと考えている場合では、母親の状況が違うため、区別して検討し援助の視点を得ることが適切と考えた。四つのライフコースの中から現在のライフコースと希望していたライフコースを記入してもらった。

3. 結果

(1) 各尺度の基礎的検討

育児不安尺度 育児不安についての 22 項目に対して、フロア効果が見られた 3 項目を外し、19 項目で因子分析（最尤法・Kaiser の正規化伴うオブリミン回転）を行ったところ、4 因子が抽出された。累積寄与率は 50.98% であった（表 1）。第 1 因子から順に、閉塞感・犠牲感、疲労感、自信のなさ、離反願望と命名した。また、尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ、第 1 因子から順に .85, .75, .80, .75 となり、各尺度の内的整合性は高く、ほぼ満足のいく水準であると言える。

表 1 育児不安尺度(最尤法 Kaiser の正規化を伴うオブリミン法回転)

	I	II	III	IV
(閉塞感・犠牲感)				
自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう。	.789	-.094	-.027	-.103
子どもとばかりいて孤立した感じがする。	.785	.100	-.069	-.066
子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない。	.717	.022	.023	.059
何か心が満たされず空虚である。	.492	-.135	-.059	.212
だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思うことがある。	.454	-.090	-.038	.212
子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う。	.436	-.068	.029	.309
(疲労感)				
いつも疲れている感じがする。	.042	-.876	-.011	-.103
毎日くたくたに疲れる。	-.018	-.761	.007	-.048
生活の中にゆとりを感じる。 (*)	.039	.511	.049	-.076
朝めざめがさわやかである。 (*)	-.035	.444	-.013	-.074
(自信のなさ)				
自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある。	.027	.023	-.821	-.033
自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある。	.002	.007	-.812	-.043
子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある。	.069	.008	-.699	.013
自分は子どもをうまく育てていると思う。 (*)	.049	.062	.479	-.085
(離反願望)				
子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。	.075	.024	-.016	.761
家事や育児など何もしたくない気持ちになることがある。	.011	-.149	-.052	.659
子どもがわざわざしてイライラしてしまう。	.038	-.019	-.218	.425
因子相関行列		I	II	III
			-.318	-.465
		I		.527
			.399	-.505
		II		
				-.494
		III		
		IV		

(*)は逆転項目

時間的展望体験尺度 因子分析（最小 2 乗法・プロマックス回転）を行ったところ、先行研究と同様の 4 因子が得られた。累積寄与率は 50.88% であった（表 2）。第 1 因子から、将来の目標指向性、現在の充実感、過去の受容、将来の希望と命名した。尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ、順に .83, .78, .78, .80 となった。

表2 時間的展望体験尺度(プロマックス回転後の因子パターン)

	I	II	III	IV
(将来の目標指向性)				
私には、将来の目標がある。	.936	-.086	-.008	-.018
私には、だいたいの将来計画がある。	.837	-.046	.052	-.005
将来のためを考えて今から準備していることがある。	.599	.022	-.020	.018
私の将来は漠然としていてつかみどころがない。 (*)	.575	.158	-.022	.107
10年後、私はどうなっているのかよくわからない。 (*)	.352	.252	.065	.142
(現在の充実感)				
毎日が同じことの繰り返しで退屈だ。 (*)	.046	.773	-.039	-.150
毎日の生活が充実している。	-.098	.704	.049	.012
今の自分は本当の自分ではないような気がする。 (*)	.003	.650	-.047	.156
毎日が何となく過ぎていく。 (*)	.206	.590	-.040	-.074
今の生活に満足している。	-.083	.483	-.006	.171
(過去の受容)				
私の過去はつらいことばかりだった。 (*)	-.022	-.034	.924	-.077
過去のことはあまり思い出したくない。 (*)	.057	-.078	.768	-.057
私は過去の出来事にこだわっている。 (*)	-.023	.069	.669	-.015
私は、自分の過去を受け入れることができる。	-.025	-.003	.407	.195
(将来の希望)				
私の将来には、希望がもてる。	-.032	.009	-.062	.938
自分の将来は自分で切り開く自信がある。	.168	-.058	-.052	.700
将来のことはあまり考えたくない。 (*)	.154	.056	.187	.398
私には未来がないような気がする。 (*)	-.076	.211	.251	.386
因子相関行列				
	I	II	III	IV
I		.401	.127	.543
II			.408	.619
III				.505
IV				

(*)は逆転項目

(2) ライフコース別にみた時間的展望高低と希望したライフコースの一一致・不一致による育児不安の検討

1726名のうち欠損値を除いた1498名を分析対象とし、ライフコース別に現実と希望のライフコースの母親の人数を表3に示す。時間的展望下位尺度の現在の充実感、将来の目標指向性、過去の受容、将来の希望得点をそれぞれ上位25%High群(H群)、下位25%Low群(L群)に分類した。現在の充実感 HL群(2)と希望していたライフコース一致・不一致群(2)、将来の目標指向性 HL群(2)と希望していたライフコース一致・不一致群(2)、過去の受容 HL群(2)と希望していたライフコース一致・不一致群(2)、将来の希望 HL群(2)と希望していたライフコース一致・不一致群(2)を独立変数とし、育児不安下位尺度得点を従属変数とする2要因2×2水準の分散分析をライフコース別にそれぞれ行った(表4、表5、表6、表7)。

表3 ライフコース別 希望と現実のライフコースの母親の人数

現在のライフコース	I 就業継続型 (511)		II 再就職型 (401)		III 専業主婦型 (332)		IV 再就職希望型 (255)	
希望していたライフコース	希望と同じコース (401)	希望と違うコース (110)	希望と同じコース (128)	希望と違うコース (273)	希望と同じコース (170)	希望と違うコース (162)	希望と同じコース (137)	希望と違うコース (118)
I 就業継続型	401 (78.5%)			123 (30.7%)		73 (22.0%)		75 (29.4%)
II 再就職型		6 (1.2%)	128 (31.9%)			15 (4.5%)		13 (5.1%)
III 専業主婦型		64 (12.5%)		99 (24.7%)	170 (51.2%)			30 (11.8%)
IV 再就職希望型		40 (7.8%)		51 (12.7%)		74 (22.3%)	137 (53.7%)	

1) 現在の充実感高低とライフコース一致・不一致による育児不安因子得点の検討

結果、現在の充実感 HL 群と希望していたライフコース一致・不一致群を独立変数とした 2 要因の分散分析では、現在の充実感 HL 群の主効果が有意で、すべてのライフコースにおける閉塞感・犠牲感、疲労感、自信なさ、離反願望得点は、H 群が L 群より低かった。

ライフコース一致別の主効果は、就業継続型では疲労感、自信なさにおいてみられ、再就職型では閉塞感・犠牲感、疲労感、自信なさ、離反願望の育児不安因子すべてにおいてみられ、専業主婦型では離反願望においてのみみられた。再就職希望型では、ライフコース一致別の主効果はみられなかった（表 4）。

表4 現在の充実感HL別・ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

一致・不一致群	一致群		不一致群		F値			
	充実感HL群	H群	L群	H群	L群	一致別	HL別	交互作用
就業継続型	N	131	85	26	34			
	閉塞感・犠牲感	1.57 (0.45)	2.53 (0.59)	1.62 (0.46)	2.39 (0.41)	0.30	67.63***	0.96
	疲労感	2.58 (0.55)	2.99 (0.55)	2.68 (0.54)	3.34 (0.42)	8.83**	24.06***	1.78
	自信なさ	2.32 (0.55)	2.86 (0.54)	2.65 (0.45)	2.84 (0.61)	4.14*	11.17***	3.01
	離反願望	2.20 (0.64)	2.94 (0.49)	2.27 (0.79)	2.88 (0.47)	0.52	31.20***	0.98
再就職型	N	29	39	64	86			
	閉塞感・犠牲感	1.51 (0.44)	2.45 (0.50)	1.77 (0.56)	2.73 (0.56)	14.09***	81.65***	1.10
	疲労感	2.47 (0.62)	2.87 (0.45)	2.54 (0.54)	3.10 (0.57)	7.47**	19.49***	0.67
	自信なさ	2.22 (0.53)	3.01 (0.53)	2.50 (0.54)	3.05 (0.56)	6.02*	39.10***	1.30
	離反願望	2.05 (0.78)	2.99 (0.44)	2.44 (0.66)	3.12 (0.54)	9.37**	48.87***	2.61
専業主婦型	N	38	48	29	48			
	閉塞感・犠牲感	1.59 (0.47)	2.73 (0.50)	1.64 (0.52)	2.82 (0.51)	0.78	113.85***	0.22
	疲労感	2.24 (0.56)	2.79 (0.57)	2.19 (0.49)	2.86 (0.47)	0.11	25.91***	0.30
	自信なさ	2.32 (0.50)	2.91 (0.54)	2.35 (0.62)	3.06 (0.58)	0.99	31.43***	0.70
	離反願望	2.09 (0.66)	3.04 (0.62)	2.36 (0.71)	3.22 (0.48)	4.21*	49.16***	1.89
再就職希望型	N	25	39	20	33			
	閉塞感・犠牲感	1.71 (0.62)	2.60 (0.39)	1.71 (0.57)	2.78 (0.54)	0.37	44.12***	0.90
	疲労感	2.32 (0.70)	2.71 (0.41)	2.34 (0.65)	2.95 (0.46)	1.73	15.46***	1.12
	自信なさ	2.36 (0.62)	2.81 (0.41)	2.25 (0.50)	2.90 (0.48)	0.11	20.26***	0.73
	離反願望	2.21 (0.77)	2.89 (0.39)	1.98 (0.63)	2.95 (0.56)	0.75	26.95***	0.83

()内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

2) 将来の目標指向性高低とライフコース一致・不一致による育児不安因子得点の検討

将来の目標指向性 HL 群と希望していたライフコース一致・不一致群を独立変数とした 2 要因の分散分析では、就業継続型の閉塞感・犠牲感において、交互作用が $F(1, 250)=3.22$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1, 250)=26.85$, $p<.001$, 将來の目標指向性 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果 $F(1, 250)=4.00$, $p<.05$ がみられた（図 1）

就業継続型の自信なさにおいて、交互作用が $F(1, 250)=4.47$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1, 250)=22.59$, $p<.001$, 将來の目標指向性 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果 $F(1, 250)=7.21$, $p<.01$ がみられた（図 2）。

就業継続型では疲労感において、将来の目標指向性 HL 群の主効果がみられ、H 群が L 群より有意に疲労感が低かった。また、ライフコース一致・不一致群の主効果もみられ、一致群が不一致群より疲労感が有意に低かった。さらに就業継続型では離反願望においても、将來の目標指向性 HL 群の主効果がみられ、H 群が L 群より有意に離反願望が低かった（表 5）。

再就職型では自信なさにおいて、交互作用が $F(1, 234)=3.14$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1, 234)=18.01$, $p<.001$, ライフコース不一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1, 234)=13.09$, $p<.001$, 将來の目標指向性 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果 $F(1, 234)=10.65$, $p<.01$ が見られた（図 3）。

再就職型では離反願望において、交互作用が $F(1, 234)=4.42$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1, 234)=17.28$, $p<.001$, ライフコース不一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1, 234)=8.88$, $p<.001$, 将來の目標指向性 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果 $F(1, 234)=14.68$, $p<.001$ が見られた（図 4）。

再就職型では閉塞感・犠牲感、疲労感において、将来の目標指向性 HL 群の主効果がみられ、H 群が L 群より有意に閉塞感・犠牲感および疲労感が低かった。また、ライフコース一致不一致群の主効果もみられ、一致群が不一致群より有意に閉塞感・犠牲感および疲労感が低かった（表 5）。

専業主婦型と再就職希望型では、閉塞感・犠牲感、疲労感、自信なさ、離反願望のすべての育児不安因子において、将来の目標指向性 HL 群の主効果が有意で H 群が L 群より低かった。また、専業主婦型の離反願望において、ライフコース一致不一致群の主効果が有意で一致群が低かった（表 5）。

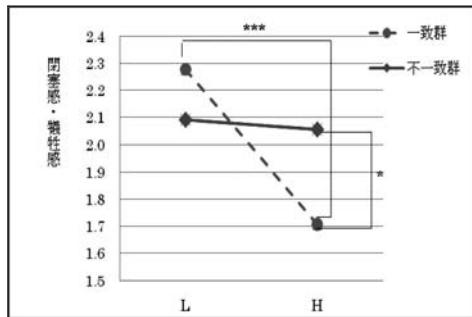


図1【就業継続型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標 HL による閉塞感・犠牲感得点

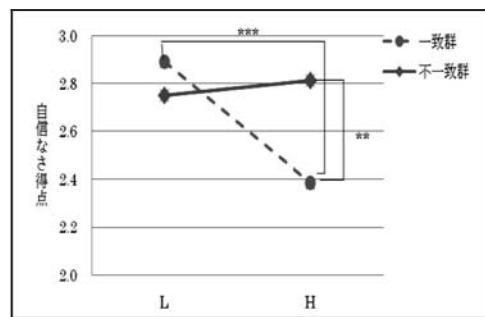


図2【就業継続型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標 HL による自信なさ得点

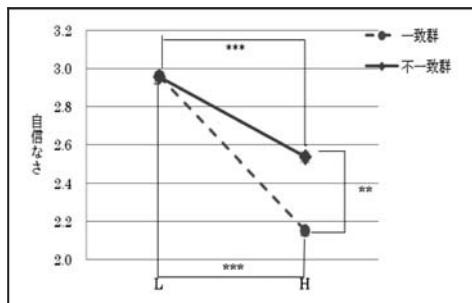


図3【再就職型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標 HL による自信なさ得点

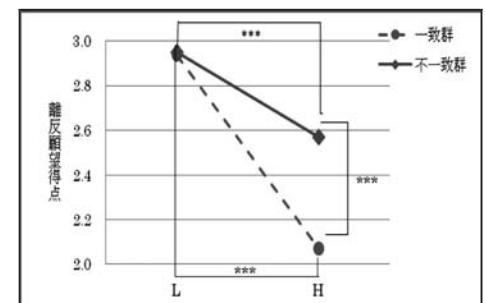


図4【再就職型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標 HL による離反願望得点

表5 将来の目標HL別・ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

	一致・不一致群 将来の目標HL 群	一致群		不一致群		F値		
		H群	L群	H群	L群	一致別	HL別	交互作用
就業継続型	N	131	78	12	33			
	閉塞感・犠牲感	1.71 (0.56)	2.28 (0.68)	2.06 (0.73)	2.09 (0.47)	0.29	4.34*	3.22*
	疲労感	2.60 (0.61)	2.95 (0.61)	3.02 (0.61)	3.10 (0.51)	9.66**	5.27**	1.23
	自信なさ	2.39 (0.55)	2.89 (0.60)	2.81 (0.64)	2.75 (0.64)	3.55*	4.02*	4.47*
再就職型	離反願望	2.24 (0.64)	2.83 (0.63)	2.50 (0.63)	2.66 (0.66)	0.06	5.95**	2.21
	N	28	37	82	91			
	閉塞感・犠牲感	1.58 (0.55)	2.31 (0.58)	1.93 (0.63)	2.42 (0.60)	11.9***	26.00***	0.98
	疲労感	2.51 (0.63)	2.95 (0.52)	2.71 (0.58)	2.95 (0.58)	6.95**	10.25***	2.15
専業主婦型	自信なさ	2.15 (0.61)	2.96 (0.52)	2.54 (0.55)	2.96 (0.55)	7.45**	30.28***	3.14*
	離反願望	2.07 (0.78)	2.94 (0.51)	2.57 (0.67)	2.95 (0.53)	9.21**	25.73***	4.42*
	N	31	58	22	45			
	閉塞感・犠牲感	1.70 (0.55)	2.43 (0.59)	1.71 (0.53)	2.46 (0.62)	0.31	30.74***	0.14
再就職希望型	疲労感	2.27 (0.50)	2.69 (0.61)	2.26 (0.63)	2.78 (0.54)	0.31	12.46***	0.15
	自信なさ	2.33 (0.55)	2.86 (0.50)	2.36 (0.48)	2.87 (0.64)	0.53	16.39***	0.26
	離反願望	2.17 (0.69)	2.87 (0.71)	2.50 (0.66)	2.93 (0.54)	3.82*	13.73***	0.93
	N	27	37	29	33			
再就職希望型	閉塞感・犠牲感	1.84 (0.65)	2.32 (0.84)	1.98 (0.55)	2.35 (0.74)	0.68	10.51***	0.15
	疲労感	2.46 (0.61)	2.57 (0.50)	2.35 (0.64)	2.79 (0.48)	1.05	3.81*	1.47
	自信なさ	2.42 (0.66)	2.68 (0.42)	2.48 (0.47)	2.73 (0.54)	0.06	4.39*	0.54
	離反願望	2.22 (0.75)	2.70 (0.55)	2.28 (0.80)	2.69 (0.70)	0.01	9.20***	0.18

()内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

3) 過去の受容高低とライフコース一致・不一致による育児不安因子得点の検討

過去の受容 HL 群と希望していたライフコース一致・不一致群を独立変数とした 2 要因の分散分析では、再就職希望型の閉塞感・犠牲感において、交互作用が $F(1, 125)=3.44$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース不一致群における過去の受容 HL の単純主効果 $F(1, 125)=4.69$, $p<.01$ 、過去の受容 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果の傾向 $F(1, 125)=3.84$, $p<.10$ がみられた（図 5）。

再就職希望型の閉塞感・犠牲感を除くすべてのライフコースにおけるすべての育児不安因子において、過去の受容 HL の主効果がみられ、H 群が L 群より育児不安因子得点が有意に低かった（表 6）。

ライフコース一致別の主効果は、就業継続型では疲労感において、再就職型では閉塞感・犠牲感、疲労感、離反願望においてみられ、ライフコース一致群が閉塞感・犠牲感、疲労感、離反願望が有意に低かった。専業主婦型と再就職希望型では、ライフコース一致別の主効果はみられなかった（表 6）。

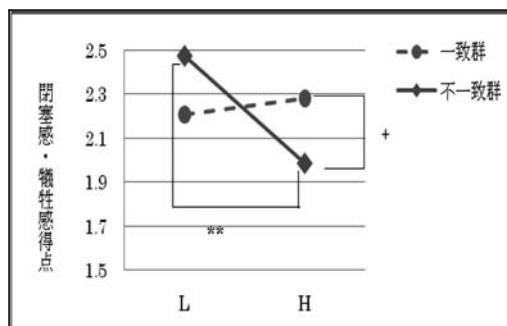


図5【再就職希望型】ライフコース一致群不一致群の過去受容 HLによる閉塞感・犠牲感得点

表6 過去の受容HL別・ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

	一致・不一致群 過去の受容HL 群	一致群		不一致群		F値		
						一致別	HL別	交互作用
		H群	L群	H群	L群			
I	N	115	90	21	38			
就業 継続 型	閉塞感・犠牲感	1.81 (0.56)	2.20 (0.64)	1.80 (0.53)	2.21 (0.55)	0.02	9.89***	0.04
	疲労感	2.65 (0.56)	2.86 (0.54)	2.89 (0.54)	3.14 (0.55)	10.25**	5.87**	0.94
	自信なさ	2.49 (0.55)	2.79 (0.58)	2.57 (0.61)	2.72 (0.59)	2.02	3.53*	2.96
	離反願望	2.36 (0.66)	2.74 (0.57)	2.37 (0.69)	2.62 (0.73)	0.32	5.59**	0.34
II 再就職 型	N	31	33	55	87			
	閉塞感・犠牲感	1.72 (0.49)	2.38 (0.56)	1.86 (0.54)	2.47 (0.60)	5.05*	26.18***	0.42
	疲労感	2.40 (0.51)	2.80 (0.46)	2.71 (0.60)	3.01 (0.53)	9.34**	8.86***	1.66
	自信なさ	2.51 (0.51)	2.83 (0.62)	2.53 (0.53)	2.94 (0.53)	2.15	9.79***	0.39
III 専業 主婦 型	離反願望	2.24 (0.62)	2.89 (0.54)	2.59 (0.58)	2.95 (0.64)	5.50*	15.16***	1.79
	N	35	53	31	55			
	閉塞感・犠牲感	1.90 (0.56)	2.48 (0.61)	1.91 (0.60)	2.52 (0.62)	0.56	20.69***	0.20
	疲労感	2.36 (0.54)	2.79 (0.55)	2.45 (0.44)	2.76 (0.60)	0.51	10.43***	0.36
IV 再就職 希望 型	自信なさ	2.54 (0.46)	2.80 (0.51)	2.36 (0.63)	2.92 (0.58)	0.12	12.04***	1.94
	離反願望	2.41 (0.66)	2.87 (0.68)	2.59 (0.61)	2.91 (0.70)	2.43	7.50***	0.27
	N	43	25	30	31			
	閉塞感・犠牲感	2.28 (0.82)	2.21 (0.54)	1.98 (0.62)	2.47 (0.60)	0.06	1.73	3.44*
	疲労感	2.41 (0.57)	2.58 (0.40)	2.42 (0.46)	2.88 (0.47)	1.87	5.28**	1.69
	自信なさ	2.60 (0.48)	2.78 (0.38)	2.40 (0.45)	2.81 (0.55)	0.54	5.92**	1.40
	離反願望	2.51 (0.69)	2.88 (0.51)	2.33 (0.68)	2.81 (0.70)	1.13	7.49***	0.36

()内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

4) 将来の希望高低とライフコース一致・不一致による育児不安因子得点の検討

将来の希望 HL 群と希望していたライフコース一致・不一致群を独立変数とした 2 要因の分散分析では、再就職型の疲労感において、交互作用が $F(1, 219)=3.18$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の希望 HL の単純主効果 $F(1, 219)=3.78$, $p<.05$, ライフコース不一致群における将来の希望 HL の単純主効果 $F(1, 219)=26.22$, $p<.001$, 将來の希望 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果の傾向 $F(1, 219)=2.81$, $p<.10$, 将來の希望 L 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果 $F(1, 219)=9.54$, $p<.01$ がみられた（図 6）。

すべてのライフコースにおけるすべての育児不安因子において、将来の希望 HL の主効果がみられ、H 群が L 群より育児不安因子得点が有意に低かった（表 7）。

ライフコース一致別の主効果は、就業継続型では疲労感と自信なさにおいて、再就職型では自信なさを除くすべての育児不安因子においてみられ、ライフコース一致群が育児不安因子得点が有意に低かった。専業主婦型と再就職希望型では、ライフコース一致別の主効果はみられなかった（表 7）。

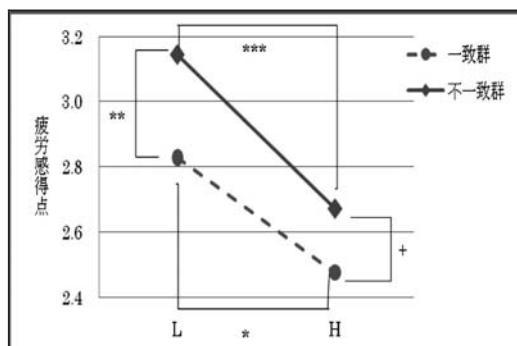


図 6【再就職型】ライフコース一致群不一致群の
将来の希望 HL による疲労感得点

表7 将来の希望HL別・ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

将来の希望HL群	一致・不一致群		一致群		不一致群		F値		
			H群	L群	H群	L群	一致別	HL別	交互作用
	N		107	93	24	38			
就業継続型	閉塞感・犠牲感	1.66	(0.52)	2.36	(0.66)	1.88	(0.52)	2.25	(0.48)
	疲労感	2.66	(0.63)	2.97	(0.57)	2.82	(0.56)	3.21	(0.58)
	自信なさ	2.41	(0.59)	2.85	(0.55)	2.72	(0.55)	2.81	(0.65)
	離反願望	2.23	(0.69)	2.81	(0.50)	2.46	(0.55)	2.67	(0.69)
再就職型	N	31		35		57		100	
	閉塞感・犠牲感	1.71	(0.51)	2.40	(0.48)	1.85	(0.63)	2.50	(0.57)
	疲労感	2.48	(0.53)	2.83	(0.46)	2.67	(0.55)	3.15	(0.48)
	自信なさ	2.32	(0.56)	2.92	(0.50)	2.49	(0.46)	3.03	(0.55)
専業主婦型	離反願望	2.24	(0.62)	2.96	(0.46)	2.55	(0.63)	3.01	(0.55)
	N	36		48		32		45	
	閉塞感・犠牲感	1.89	(0.62)	2.55	(0.56)	1.73	(0.49)	2.59	(0.53)
	疲労感	2.48	(0.57)	2.74	(0.56)	2.41	(0.56)	2.86	(0.50)
再就職希望型	自信なさ	2.42	(0.51)	2.91	(0.52)	2.30	(0.61)	3.06	(0.51)
	離反願望	2.44	(0.66)	3.01	(0.60)	2.48	(0.68)	3.03	(0.63)
	N	36		22		38		31	
	閉塞感・犠牲感	2.10	(0.69)	2.32	(0.51)	1.98	(0.61)	2.53	(0.65)
	疲労感	2.49	(0.66)	2.67	(0.26)	2.43	(0.64)	2.92	(0.43)
	自信なさ	2.57	(0.63)	2.69	(0.45)	2.38	(0.53)	2.85	(0.41)
	離反願望	2.43	(0.83)	2.79	(0.48)	2.40	(0.66)	2.75	(0.59)
							0.31	6.19**	1.07

()内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

4. 考察

(1) 時間的展望およびライフコースと育児不安

ライフコースごとに希望したライフコースと一致している群と一致していない群では現在の充実感の高低、将来の目標指向性の高低、過去の受容の高低、将来の希望の高低によって、育児不安因子得点に差があるのかを検討した。すべてのライフコースにおいて過去・現在・未来への肯定的な意識が高い方が、育児不安が低いことが示された。過去を受容し、将来の見通しをもって現在を充実して生きることは育児不安を軽減することが示唆された。それはどのライフコースにおいても時間的展望の確立によって育児不安が軽減されるということが示唆され、先行研究（宮本、2007）を支持した。

また、希望したライフコースと一致しているか否かが育児不安と関連しているかということに関しては、主に就業継続型と再就職型において希望したライフコースと一致している方が育児不安が低いことが示された。一方、専業主婦型や再就職希望型ではライフコースが希望したライフコースと一致しているか不一致であるかは、育児不安にほとんど有意差がないことが示された。名越ら（1997）の母親のライフコースと育児不安の程度との関連の調査では、結婚・出産前に専業主婦を希望していた母親群が、他のライフコースを希望していた母親群と比較して育児不安の程度が有意に高いことを明らかにした。希望のライフコースと一致して専業主婦になった母親の方が育児不安が高かったという結果である。また、母親のライフコース希望は、結婚・出産前と現在では大きな変化が見られ、就業希望へと変化している母親が大多数であったと述べている。望んで専業主婦になった母親が就業希望へとライフコースが変化しているということから、現代の母親の育児不安は育児そのものへの不安とともに、自分自身の生きがいがないことや、社会に出て自分の能力が発揮できないという状況への不安も大きな要因ではないかと推察される。望んで専業主婦をしている母親も不本意ながら専業主婦をしている母親も育児不安に差がないという本研究の結果は、先行研究と比較して、望んで専業主婦になったからといって、必ずしも育児不安が低いわけではないという点では一致している。しかし、名越ら（1997）の研究のように、希望のライフコースと一致している専業主婦の方が育児不安が高いという結果にはならなかった。専業主婦にとってライフコースが希望と一致しているか否かというより、実際に育児をしてみて、そこに喜びを見出し、育児不安を感じずに対応できるかどうかが問題なのではないだろうか。専業主婦型と再就職希望型において、希望したライフコースであるか否かは、育児不安に差がないことについて、その中身はかなり個人によって違いが出てくると考えられる。詳細については、やはり今後面接調査などによって深めていく必要があると思われる。

(2) ライフコース別にみた時間的展望高低と希望したライフコースの一貫性による育児不安の検討

次に、ライフコースごとに交互作用が見られた点を中心に考察を進めたい。

就業継続型では、閉塞感・犠牲感と育児の自信なさにおいて、将来の目標指向性の高低と

ライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられ、希望したライフコースと一致している群では将来の目標指向性が高い方が閉塞感・犠牲感、自信なさは低く、希望したライフコースと一致していない場合は将来の目標指向性が高くても低くても閉塞感・犠牲感、育児の自信なさは変わらないことが示された。母親が望んで就業を継続している場合は、将来の目標をもって生きることが、閉塞感・犠牲感を軽減し、育児の自信を強めることになるが、反対に不本意ながら仕事を継続している場合は、目標をもって生きていても閉塞感・犠牲感を軽減することや育児の自信に繋がらないことが示唆され、不本意ながら就業継続している母親は、将来の目標をもつということではなく他の視点が必要と推察される。内藤ら（1998）は、現実自己と理想自己の矛盾の程度が自尊感情に影響を与えるという視点から、母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間に開きがなければ、母親自身に肯定的な影響を与えると述べた。育児期に仕事を継続している就業継続型の母親の中で、本当は家庭に入ることを望みながら理想に反して仕事についているのであれば、母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間に開きができ、犠牲感が高まったり、自尊感情へ影響を与え、その影響が育児への自信にも影響を及ぼしているのではないだろうか。不本意で就業を継続している母親の犠牲感を弱めたり、育児への自信を高めるためには、母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間の開きを縮めることに焦点を当てて考えることが必要と思われる。

再就職型では、育児の自信なさや離反願望において、将来の目標指向性の高低とライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられ、疲労感においては、将来の希望の高低とライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられた。ライフコースと一致している群も一致しない群ともに将来の目標指向性や希望が高いことは低いことより自信なさ、離反願望、疲労感が低いことが示された。しかし、将来の目標指向性が高くなる場合と希望が高くなる場合において、次のような違いがみられた。将来の目標指向性が低い場合は、ライフコース一致群も不一致群も自信なさや離反願望において違いがないが、目標指向性が高い場合は、ライフコース一致群の方が不一致群より自信なさや離反願望が低いという結果になった。一方、将来の希望が低い場合は、ライフコース一致群が不一致群より疲労感が低いが、将来の希望が高い場合は、疲労感においてライフコース一致群と不一致群にあまり差がないという結果になった。つまり、ライフコース不一致群の将来の希望が高くなることによって、疲労感が軽減され、ライフコース一致群と差異がなくなることを示した。再就職型において、望んで再就職したのではない母親にとって希望を高くもつことが、疲労感をより効果的に軽減せるとと言えよう。また、反対に望んで再就職した母親は将来の目標をもつことが、自信なさや離反願望を効果的に弱めることから、就業継続型の場合と同じように、仕事をもって育児をする母親は、望んだライフコースを歩んでいるならば、目標をもつことが育児不安を弱めることに繋がることが示唆された。目標があること、計画を立てて見通し持てることは、自分の人生の安心感に繋がり、肯定的な感情が育児にも影響を及ぼし、育児不安を軽減すると考えられる。

再就職希望型では、閉塞感・犠牲感において、過去の受容の高低とライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられた。希望したライフコース一致群では、過去の受容が高くて低くとも閉塞感・犠牲感において変わりがないが、希望したライフコース不一致群では過去の受容が高ければ、閉塞感・犠牲感が低くなることが示された。再就職希望型では、望んだライフコースを選択できなかった母親が過去を受容することができるならば、閉塞感・犠牲感を効果的に軽減することができる事が示唆された。再就職希望型のように、結婚して一度仕事をやめて家庭に入る女性は、自分を家族としてのあり方の中で受容することが重要になるであろう。無藤ら（1996）は、成人期の女性の葛藤と統合のプロセスにおいて、成人期女性にとっての危機や葛藤が本人個人のものであるというよりは、家族としてのあり方を模索しながら、それに対処していることを示唆した。自分の過去の選択を納得し、自分を家族との関わりや家族のライフサイクルの中で創造していくことが可能になれば、閉塞感・犠牲感はさらに軽減されるものと思われる。

5. まとめと今後の課題

育児不安を軽減するために、ライフコースと時間的展望という視点から論じてきた。どのライフコースにあっても過去・現在・未来に対する肯定的な意識を高めることは育児不安を軽減することにつながること、希望したライフコースと一致している場合に育児不安が低いのは、就業継続型や再就職型のように有職の母親であること、希望したライフコースと一致しない場合に育児不安を弱める場合に、過去・現在・未来に対するどの部分の肯定的な意識に焦点を当てる事が重要であるかということは、ライフコースによって違いがあることが示唆された。今後は、過去・現在・未来を肯定的に受け止めること、時間的展望を高め、育児不安を軽減するにはどんな要因が関連するかを面接調査も用いて具体的に検討することが必要である。

引用文献

- 原口由紀子・松浦治代・矢倉紀子・佐々木くみ子・笠置綱清（2005）。母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連 小児保健研究, 63(2), 265-271.
- 岩井八郎(2010). 戦後日本型ライフコースの変容—JGSS—2009 ライフコース調査の研究視角と予備分析— 日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集[10] JGSS
- 岩田美佳(2000). 現代社会の育児不安 家政教育社
- 柏木恵子(2001). 子どもという価値 東京, 岩波書店
- 牧野カツコ(1982). 乳幼児をもつ母親と〈育児不安〉 家庭研究所紀要, 3, 35-56.
- 牧野カツコ(1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安 家庭研究所紀要, 6, 11-24.
- 牧野カツコ(1987). 乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安 家庭研究所紀要, 9,

- 牧野カツコ(1988). <育児不安>の概念とその影響要因についての再検討 家庭研究所紀要, 10, 23-31.
- 宮本純子 (2007). 乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究 心理臨床学研究, 25(3), 346-355.
- 無藤清子・園田雅代・野村法子・前川あさ美 (1996). 複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス(その3) 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 124
- 内閣府 (2006). 平成18年版国民生活白書 東京：社団法人時事画報社
- 内藤直子・橋本有理子・杉下知子 (1998). 0~3歳の乳幼児を持つ（専業母親）の子育て観尺度開発に関する研究—CPS-M97 の妥当性・信頼性の検証—日本看護科学会誌, 188(3), 1-9.
- 名越清家・小高洋子(1997). 乳幼児を持つ母親のライフコースと育児不安 福井大学教育学部紀要, 53, 52-72
- 大日向雅美(2002). 育児不安 こころの科学, 103, 日本評論社, 9-15.
- 佐々木尚之・岩井八郎・岩井紀子・保田時男 (2009). ライフコースの多様性をとらえる—JGSS-2009 ライフコース調査の設計に関するノート— 日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集, 9, JGSS Reserch Series 6 175-189.
- 白井利明 (1991). 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連 心理学研究, 62(4), 260-263.
- 白井利明(1994). 時間的体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65(1), 54-60.
- 白井利明(1995). 時間的展望と動機づけ 心理学評論, 38(2), 194-213.
- 田中文子(2001). 21世紀の子育てのあり方 現代のエスプリ, 408, 194-203
- 吉田 弘道・山中 龍宏・巷野 悟郎・太田 百合子・中村 孝・山口 規容子・牛島 廣治 (1999) . 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究 小児保健研究, 58, 697-704.